

# イメージを手放す——「即興映画」についての覚書

加藤 初代

2004年6月末頃のショット。チンという焼き上がり音と同時に簡易グリルの蓋を開けると焼き網の上には艶やかな焼き色に仕上がった干物が、ジュージューと音を立てている。このショットを見て、お腹が空いている私は美味しそうな匂いを想像し、できれば白米を盛った茶碗を持ってその場に駆けつけ、箸の先でそのぷっくりとした身をほぐして口に入れたいと欲望する。

「インプロバイズド・シネマ（即興に作った映画）」と名付けられた《日々“hibi”13 full moons》は、毎日撮影した15秒のカットを、時系列に1年間つなげた作品である。撮影にはさらに厳密なルールが設けられており、月齢に準じ満月には深夜0時、半月には朝6時、新月には正午、次の半月には18時と、毎日撮影時間をずらしていくことで、完成した96分が、「なだらかに朝がきて昼になり、そして夜がくるというリズムを生み出」<sup>1</sup>すしかけになっている。このような時間の制約に加え、ノートパソコン内蔵カメラによって撮影した後、そのパソコンで前日までの映像に新しいカットをつなぐという制作スタイルは、その時その場の状況に応じて作る即興と言え、「インプロバイズド・シネマ」という名称は的を射ている。

## 「ゲームの規則」と偶然性

このようにルールに従い即興で制作された本作について、前田は、「この作品は一見、“作者のプライベートな日記”といった印象があるかもし」れないが、むしろ「作者の意図を越えて多様な情報が残されていくという映像の特性に着目」<sup>2</sup>たと言う。敢えて制作にルールを導入し不自由さを課すことで、結果的に作品に多様性が担保されているのである。このような制作スタイルは、サイコロを振るというシンプルなルールのもと数字の偶然が多様な結果を生み出すボードゲームのようでもある。本作の制作をゲームの予測不能な面白さになぞらえれば、前田は、制作工程を積極的に楽しみ豊かな作品を生み出すために、「ゲームの規則」を設けたと言ってもいいだろう。山形国際ドキュメンタリー映画祭2005で本作が上映された際、インタビューの中で前田は、日常生活の中で毎日の撮影が惰性に陥らず楽しめるような規則を課したことを明かしている。

撮る時間帯が決まっていれば、その時だけ集中すれば

よいから、それなら可能かなと。そういうルールを設けようと思ったわけです。毎朝8時と決めるより、撮影する時間帯が変わっていくほうがおもしろいだろうと思って、月の満ち欠けを時間帯にあてはめることにしました<sup>3</sup>。

さらに、撮影時間帯の規則に、連日撮影後に決まった尺のカットをつなげていくという編集の規則を重ねることで、日々やり直しの効かない偶然の面白さが生まれる。また、ノートパソコンという機材の制約も然りである。毎日パソコンを持ち歩き、時間がきたら撮影しカットをつなぐなかで、「暗い所が撮れない」、「ズームがない」、「起動時間が遅い」といった問題が起こる。しかしむしろ、「慣れない道具を楽しむことにし」<sup>4</sup>たと前田は言う。技術的制約を偶然の面白さに昇華し生まれたものが、本作であるとも言える。このように本作は、自ら課した「ゲームの規則」により作家が作品への制御を手放したことで、多くの偶然により映像のもつ「多様な情報」という特性が引き出され、鑑賞者の自由な受容と解釈を可能にしているのである。

## ずれの生み出す心地よい不安

見る者の自由な受容とはどのようなものだろうか。冒頭のショットに戻ってみよう。ある日の食卓に上ると思いき焼き魚のショットは、例えば、鑑賞者の過去の記憶と即座に結びつき、即物的な欲望（食欲）を喚起するだろう。しかし、互いに連関のない規則的に連なる膨大なショットの流れを見終わり、暫くして振り返ると、焼き魚のショットは、何か別の像に変貌していることに気づくかもしれない。「チン」音、「ジュー」音、背景の暗色、金属のような硬質な網目、その上にあるつややかな茶色の物体。そのショットは果たしてジュージュー音を立てる焼き魚だったのだろうか？このようにショット（表象）と事物に生じたずれは、見る者の不安を掻き立てるに違いない。しかしその不安は、日常で見落としている何かを思い起こす契機になるはずだ。《日々“hibi”13 full moons》は、「鑑賞者それぞれの記憶を誘発するような作品を目指し」<sup>5</sup>ていると同時に、鑑賞者に記憶（イメージ）とその存在を疑わせ、さまざまな可能性を想起させる装置ともいえる。見る者は、不安を伴いつつ無限に思考する心地よさに身を委ねることができる。本作は、連日日記のように綴ら



《日々“hibi”13 full moons》

れるショットの連なりの中に、鑑賞者が時を意識しながら、同時に時の概念から解放されるような、思考の自由を喚起する企みに満ちているのである。

#### 制約された1日を描く

「BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW」シリーズは、制作について前田自身が作った「指示書」をもとにした5分の「即興映画」<sup>6</sup>である。「指示書」によると、「1日目 明日撮影する場所とそこに行く理由について話す（録音）」、「2日目 現地で撮影する」、「3日目 昨日の出来事について話す（録音）」、「1日目と3日目に録音した音声を順番に並べてサウンドトラックを作成し、それをベースに2日目に撮影した映像を編集してください」<sup>7</sup>と、厳密な制作ルールが規定されている。制作日程の制約が大きくその場限りの即興的な制作が想定されていることがわかる。また、制作期間だけでなく、限られた撮影素材による編集において、音と画の構成にもルールが課されており、《日々“hibi”13 full moons》と同様、「ゲームの規則」が生み出す予期せぬ偶然性という長所を生かすことで、作者の意図を越えて映像が生成していく作品といえるだろう。

この作品に関して、前田の企画者としての側面も注目される。前田は、2011年東日本大震災を機に、ウェブサイト上で作品制作を呼びかけるWebムービー・プロジェクトを立ち上げた<sup>8</sup>。このプロジェクトから生まれたオムニバス作品も、山形国際ドキュメンタリー映画祭をはじめ、国内外で上映されている。さらには、音楽家とのコラボレーションやインスタレーションなど、さまざまな表現形態で発表されており、複数の作家による即興映画の組み合わせから生まれる偶発的な映像（イメージ）が、見る者にさらに深淵で多様な思考を

促す作品群となっている。

#### 語りに抗ってみる

さて、「企画書」の存在を知らずに作品をみた鑑賞者にとって、「BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW」シリーズは日記風私的映画に見えるだろう。日付の記されたオープニングとエンディングのクレジットは、これが1日の記録であることを印象付ける。「TOKYO TOWER July 19, 2009」というオープニングタイトルに続き、東京都庁の映像が現れる。そこに、「青い東京タワーを見ています・・・明日、東京タワーに上ってみたいと思います」というモノローグが聞こえるが、おそらくほとんどの鑑賞者は、若干何かが違うと感じるものの、その語りが「都庁と森ビルにも上ってみたいと思います」と続くと、映像と言葉の整合性に安堵し、作家本人が高いビルに上ったある日の物語として5分間を見終えるだろう。本作は、日記のような素朴な語りの中に前日録音したナレーションを挿入することで小さな時制のずれが生じているのだが、そのずれはささやかなノイズとなり、見る者の記憶になんらかの痕跡を残しているはずだ。まるで、“あなたが見たものは、あなたが認識したものと同じですか？”と問いかけられているような。作家の何気ない訥々とした語りを疑い始めた時、画と音のずれのみならず、映像（イメージ）と事物の同一性もゆらぎ始めるに違いない。語りの誘惑に抗いイメージの差異に身を委ねた時、見る者は、本作に出会い直すことができるのだ。このような企みは、鑑賞者が時間を意識しつつ映像に出会い直すことに前田が重きを置いている一例と言えるのではないだろうか。

## 日々の政治性

8月は、戦争による死者を想い悼む月であり、特別な意味を帯びている。《日々“hibi”AUG 2008-2022》は、《日々“hibi”13 full moons》の制作ルールに準じ、2008年から2022年にかけて毎年8月に撮影された映像で構成した作品である。本作には、選挙、総理大臣、放射能、戦争、兵役拒否、天皇、デモ、といった、個人の立ち位置を問うような言葉が散りばめられている。8月に作家の心に去来する何がしかの想念が、即興制作の偶然の中で言葉となって現れたのかもしれない、もしかしたら、作家の政治的メッセージが込められているのかもしれないと想像することもできる。しかし、毎日ワンカット15秒の連なりが緩やかに時を刻みながら連続していく、8月のありきたりな日々の映像（イメージ）は、一つの意味へと見る者を誘うより、むしろ、人は日常的に何かを選択して生きており、何かを選ぶことは意識せずとも結局は政治的な営みでもあることを、思い起こさせるだろう。そして、それらのイメージから何を想像し、日常の中でどのような行動を選ぶのかは、見る者の自由な選択に委ねられているのである。

ここで紹介した3つのシリーズの作品は、すべて日記のような形式の作品である。前田は日記を、「人が生きる間のとらえどころのない“時間”を、周期的なリズムを刻むことで可視化させる試みと言え」<sup>9</sup>とし、時間を意識させる記録形態として作品に生かしてきた。この前田の映像に対する姿勢から生まれたインプロバイズド・シネマは、結果的に多様な解釈が可能で、見る者に開かれたものとなっている。また、前田は映像作家としての個人の表現について、「既存の映像表現を成立させている制度を疑いながら、それに抵抗することかもしれ」<sup>10</sup>ないと述べている。これらの作品は、敢えてルールを課すことで、結果的に実写映像の記録性といった映像表現の制度を問い直し、作者の意図を越えた、作家自身にとっても開かれた作品となっていると言ってもよい。前田が、「規則による何かしらの制限下での撮影行為に、無意識を含む個性が顕在化すること」<sup>11</sup>に期待しているように、これらの作品は、即興の偶然により顕在化したイメージに、作家、鑑賞者、それぞれが何かを見出し、何度でも新しく出会い直

す可能性を秘めているのだ。

うつろう映像（イメージ）に結びつく事物それ自体を捉えようと足掻きつつ、自由な思考に身を委ねることは、なんと魅力的なことだろう。そして、その都度何かを自分の手に握めたようなささやかな体験の積み重ねは、より豊かに深く生の実感へと結びついていくに違いない。

## 註

1. 「sc-007日々 "hibi" 13 full moons／前田真二郎」、<https://solchord.jp/sc007.html> (2022年10月30日確認)。
2. 同上。
3. 前田真二郎監督インタビュー「偶然と必然のコンポジション」、<http://www.yidff.jp/interviews/2005/05i115-2.html> (2022年10月30日確認)。
4. 同上。
5. 「sc-007日々 "hibi" 13 full moons／前田真二郎」前掲サイト。
6. 「“BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW”：企画について」<https://solchord.jp/byt/about.html> (2022年10月30日確認)。
7. 「“BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW”：指示書」<https://solchord.jp/byt/instruction-sheet.html> (2022年10月30日確認)。
8. 前田真二郎「2021年、“BYT”について」、[https://maedashinjiro.jp/wp-content/uploads/SPUTNIK2021\\_04.pdf#page=8](https://maedashinjiro.jp/wp-content/uploads/SPUTNIK2021_04.pdf#page=8) (2022年10月30日確認)。
9. 「教員インタビュー：前田真二郎教授」、<https://www.iamas.ac.jp/report/interview-maeda-shinjiro/> (2022年10月30日確認)。
10. 同上。
11. 前田真二郎「2021年、“BYT”について」前掲サイト。

かとう はつよ／映画祭プログラム・コーディネーター

2013年より山形国際ドキュメンタリー映画祭プログラム・コーディネーター。主な上映プログラムに「日本プログラム」(YIDFF2013-)、「政治と映画：パレスティナ・レバノン70s-80s」(YIDFF2017)、「リアリティとリアリズム：イラン60s-80s」(YIDFF2019)など。

---

第 23 回中之島映像劇場  
光の布置—前田真二郎レトロスペクティブ—配布資料をウェブに再掲  
発行：国立国際美術館  
資料発行日：2022 年 11 月 12 日